









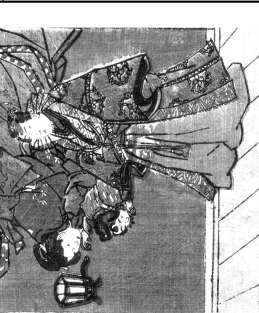









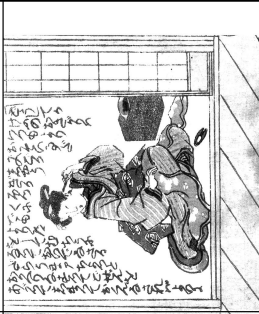


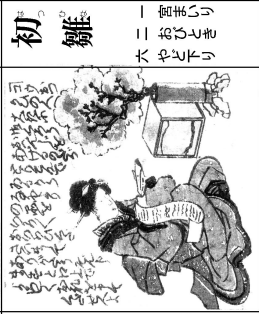

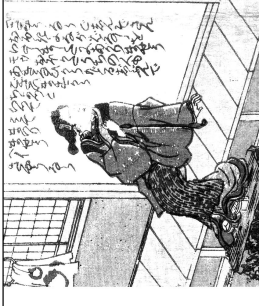
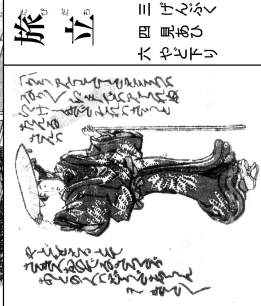


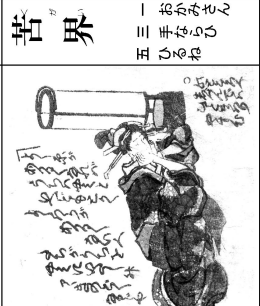


二偏 娘 一 代 成人 双 六

江戸人形町通り元大坂町代地
上州屋重蔵板

<p>三 五 六</p> <p>花嫁</p> 	<p>初産</p> <p>二 ちんちん 三 雲垂り 四 初ひな</p> 	<p>洗濯</p> <p>二 ちんちん 五 ちんちん 六 おおき</p> 	<p>嫉妬</p> <p>一 かく 三 ひろね 六 ぼろ</p> 	<p>夫婦かた</p> <p>二 しん 四 雲垂り 五 ぼろ</p> 
<p>一 三 五</p> <p>姑母</p> 	<p>元服</p> <p>一 ちんちん 三 ちんちん 三 初ひな</p> 	<p>奉公</p> <p>一 ちんちん 二 ちんちん 五 雲垂り</p> 	<p>昼寝</p> <p>三 せんだく 四 ひろね 六 ちんちん</p> 	<p>帯つき</p> <p>一 せんだく 四 ひろね 六 初ひな</p> 
<p>上</p> 	<p>見合</p> <p>四 ちんちん 五 ちんちん 六 ひろね</p> 	<p>乞乳汁</p> <p>一 初ひな 四 ちんちん 六 ちんちん</p> 	<p>手習</p> <p>三 ぼろ 五 せんだく 六 ちんちん</p> 	<p>万亭応賀作</p> <p>ふりはじめ</p> <p>一 雲垂り 二 帯つき 三 番書 四 初雛 五 せんだく 六 気</p> 
<p>御新造</p> <p>四 ちんちん 五 ちんちん 六 ちんちん</p> 	<p>聳取</p> <p>一 せんだく 四 ひろね 六 ちんちん</p> 	<p>宿下り</p> <p>二 雲垂り 五 ちんちん 六 かく</p> 	<p>折檻</p> <p>二 ひろね 五 ちんちん 六 せんだく</p> 	<p>一陽齋豊国画</p> <p>二 ちんちん 四 ちんちん 五 ちんちん</p> 
<p>おおかみさん</p> <p>一 ちんちん 四 ちんちん 六 ちんちん</p> 	<p>孝行</p> <p>一 ちんちん 四 ちんちん 六 ちんちん</p> 	<p>髪すき</p> <p>三 ちんちん 四 ちんちん 五 ちんちん</p> 	<p>初雛</p> <p>二 雲垂り 三 ちんちん 六 ちんちん</p> 	<p>宮参</p> <p>二 ちんちん 四 ちんちん 五 ちんちん</p> 
<p>い</p> 	<p>旅立</p> <p>三 ちんちん 四 ちんちん 六 ちんちん</p> 	<p>手鍋</p> <p>一 ちんちん 五 ちんちん 六 ちんちん</p> 	<p>悟気</p> <p>四 ちんちん 五 ちんちん 六 ちんちん</p> 	<p>苦界</p> <p>一 ちんちん 三 ちんちん 五 ひろね</p> 

■婚礼の流れ——堀田連山・文化10年(1813)『絵本婚礼道しるべ』ほか

*丸付数字は図録の記事番号、本書以外の記事は【 】に出典を示した。

1) 見合①……*仲人を立て吉日を選ぶ。供を連れた男女が茶屋などで遠目から互いに見る【女雑書教訓鑑】

2) 結納②……婚姻が決まった後に婿方より金品を贈る。結納・結納。ゆいぬれ たのみ* 結納品は、白銀・白綿子・緋縮緬・紅梅・綿・熨斗・鯛・昆布・鯉節・鯛・御樽の11種以下、9種・7種・3種【百人一首(江戸後期)】

3) 結納披露目・衣装振舞(部屋飾)……結納品や衣装・婚礼道具等のお披露目【女寿蓬莱台・嫁入談合柱】

4) 嫁入道具搬入③……嫁入の一両日前(古くは婚礼当日)に婚家へ搬入。

5) 嫁入④……式三献(本来は3種の膳毎に3種の盃を飲む儀式)で門出を祝った後、嫁が輿に乗って出発(嫁入道中)。

6) 打合の餅・紙燭指……しそくさし つまど妻戸(両開きの扉)の前の左右に臼を置き、男女二組(貞丈雑記によれば老夫婦)が餅を搗く。その間を輿が通過したら左の餅を右へ移して一つに搗き合わせる。また、妻戸の側で左右に紙燭(松の棒を加工した松明)たいまつをともす2人の間を輿が通過したら、左を右の芯と芯を合わせて火を消す【女五常訓】*近年は遠慮して行わない【婚礼仕用壘栗袋】*極めて高貴の礼で、平人の所作ではない【女文台綾囊】

7) 皆子餅……打合の餅(合わせてから三杵半搗く)から360個の丸餅を作って嫁の実家に贈る【女雑書教訓鑑】*580(あるいは587)個の皆子餅は江戸期の慣習で故実に非ず【貞丈雑記】

8) 祝言献立……種々式法あり。慣れたる人に尋ね合わすべし。

9) 祝言座敷⑤……婚家の縁側に輿を付け、待女郎の案内で控え室へ移動し、三三九度の盃事(種々の式法あり)。

10) 式三献(三三九度)……三ッ組の盃で3回ずつ酒を飲み交わす(固めの盃)。*婚礼の座付きや盃事はさして金銀の費えがないため本式で行いたいものである【女小学教訓】

11) 色直⑥……式三献の後、婿方が用意した小袖に着替える。*式三献を終え、銚子や膳を食した後、婿方より色直の小袖を遣わす。貴人は御帳台みちようだいに入って召し替える。平人はその場で白無垢の上着を取って色直の小袖を打ちかける【女訓用文都錦】

12) 舅姑盃……色直後に、花嫁が舅姑と対面し挨拶(その後、祝宴となる)【女今川教玉章】

13) 部屋入の盃⑦……新婚初夜に寢室で新郎新婦が盃を交わす(床盃) *江戸期の流行で故実に非ず【貞丈雑記】

14) 部屋見舞⑧……*嫁入の翌朝、嫁方親類の女性達が贈物を持参し、婚家親類の女性達へ順次挨拶【女寿蓬莱台】

15) 五日帰(花 帰)……嫁入から5日目の嫁の里帰り。5日滞在後、土産物を持参し婚家へ戻る【女寿蓬莱台】

16) 打上(内上・内揚)……新婦里帰(五日帰)に同行した新郎が姑(新婦の母)と初めて対面する儀式【嫁娶重宝記】

17) 聳入⑨……婚礼後に新郎が初めて新婦の実家を訪れ、挨拶する。

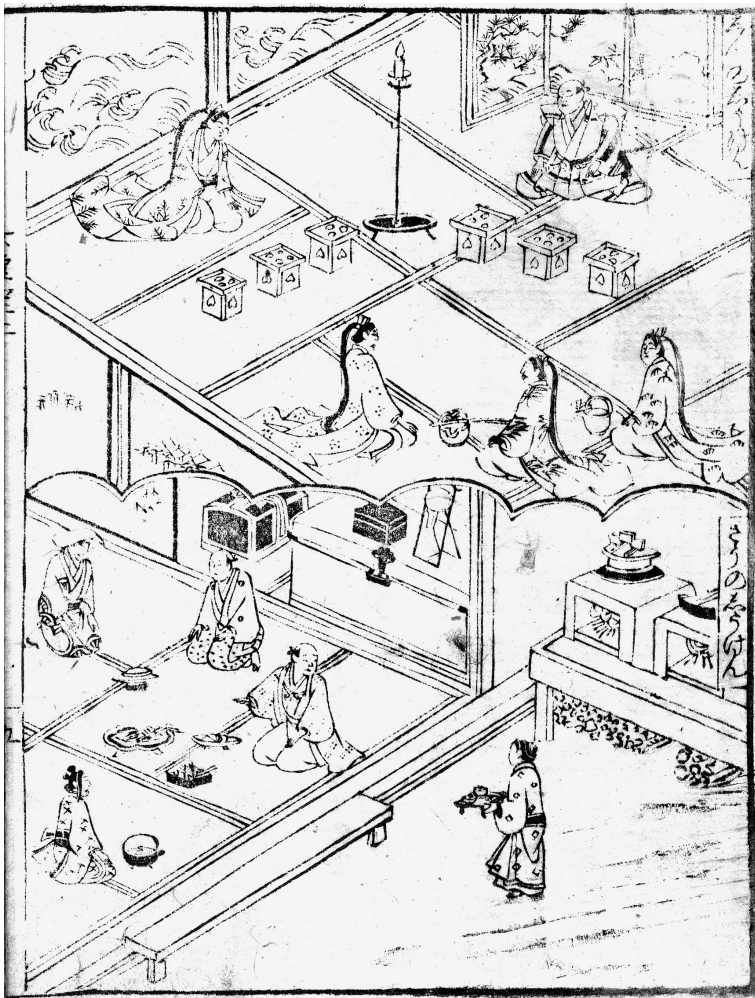
18) 里見舞・婿引出物……嫁が実家に帰った翌日、婿方の親類から里見舞(贈物や料理)が届く【女寿蓬莱台】*婿の引出物については貴人には細かい作法があるが、町人は都合の良い引出物で構わない。中には気張って形見になるような引出物を贈る者もいるが、子孫相続の為の祝言であるから、祝儀は軽くし家の存続を計るのが町人の婚礼の至極である【女訓用文都錦】

19) 膝直……婚礼後、舅方に両家一門を招いて饗応(乱酒乱舞の大騒ぎ、芸尽くしやら無礼講やら…)【女寿蓬莱台】



色直し後は 教えねど 承知なり(溪斎英泉画『神事行灯』3編)

■武家と庶民の婚礼(真の祝言・草の祝言)



【上段=江戸前期】

元禄5年(1692)刊『女重宝記』

(苗村丈伯作)

【下段左=江戸中期】

宝暦13年(1763)刊『女小学教艸』

(北尾辰宣画)

【下段右=江戸後期】

弘化4年(1847)刊『絵入日用女重宝記』

(葛飾応為画)

●不自由な武家の結婚

武家諸法度で「国主・城主・一万石以上ならびに近習、物頭は私^{ひそか}に婚姻を結ぶべからざる事」とされた武士の結婚には種々の制約があった。例えば幕臣(旗本・御家人)の場合、他大名の家臣との縁組や幕臣同士・同じ役職同志の縁組、農工商との縁組が禁止されていた(養子・養女の抜け道はあった)。



■庶民の結婚マニュアル——津田正生^{まさなり}作、文化5年(1808)刊『婚姻男子訓』^{こんいんなんしゅくくん}

○縁談の大意

- 1)【老人曰】仲人は親族か朋友が最上(信頼できる)。その他はこれに劣る(非を隠す)。
- 2)【或人曰】縁談は近所に限る。遠方・他国の縁談は要注意(家格や家系が良ければ近年貧困になった家、富貴なら悪事が支障がある家)。*【或書云】近所とは2里以内で、3里以上を遠方とす。
- 3)【老人曰】実の両親が揃っている娘を娶るのが望ましい。居候の娘は避けた方がよい。
- 4)【五不取云】①逆家(不忠不孝)、②乱家(淫乱不義)、③刑罰を受けた家、④悪疾(癩病・癩癩・瘡毒)に縁のある家、⑤父亡き跡取りの家(親の教育がない為)の娘は娶らない。*『大戴礼記』^{だたいらいき}
- 5)【司馬温公曰】婚姻は、婿や嫁の性行や家法を吟味せよ。決して富貴を求めてはいけない。*『朱子小学』
- 6)【或人曰】身の程を弁えず、あながちに人ばかりを選ぶのは愚である。【予言】大方七分も良ければ上々の部と心得て取り組むべき。
- 7)【愚言】世間に「縁は定まり事」と言う人がいるが、そうではない。うち捨てておけば、3年、5年経っても縁の来ることはない。最初から堪忍を旨として努力すれば、因となり縁となること速やかである。
- 8)【胡環^{こえん}曰】嫁は必ず我が分限より軽きをよしとす。軽き方より娶れば舅姑にもよく仕え、夫を大切にせず婦道を守る。*『小学』抜粹。胡環(993-1059)は宋代の教育者。胡安定先生と呼ばれた。

○婚姻する年月日

- 9)【宿老^{ちゆうらう}曰】中家産以上で部屋住み(家督相続前)の子息は、26歳の春に16歳の娘を娶るのが理想。
- 10)【阿州人曰】阿波国は城下といえども、多くは19、20歳で嫁ぐ。14、15歳で縁付く娘は極めて稀。
- 11)【三才図会云】赤道直下の国では、女子は7歳から9歳までに破瓜^{はか}す(月経が始まる)という。
- 12)【老医曰】人身には虚症(虚証*体の機能低下で不健康になった状態)と実症(実証*体外の有害物によって不健康になった状態)があるが、実症の娘が19、20歳までに結婚しないと鬱熱の症状が生じる。これが長引くと労咳(肺結核)になる。

○夫婦^{とし}年齢^と違^いの法則

- 13)【張南軒曰】夫婦の年違いは夫より妻が2歳から15歳若いのが良く、これが陰陽加減の法則である。*張南軒(1133-80)は南宋の儒学者・政治家。
- 14)【老翁曰】正月より12月まで婚姻すべきでない月はないが、吉事としては春・夏に執り行うのが良い。日を定めるにも月の前半15日までが良い。【老人評云】先祖の血脈が絶えんとする場合の縁組みなら、この法則に外れても良い。
- 15)【愚言】張南軒の言葉は守るべきだが、2、3歳違いでは妻が老年になると釣合が悪い。14、15歳違いでは夫が老けすぎて良くない。7、8歳違いは悪くないが、子ができた後^{しゅらい}恰好の良いののは10歳違いである。聖人(周公旦)が、男は30歳で娶り、女は20歳で嫁すとお示しになった通りである。*『周礼』「令男三十而娶、女二十而嫁」。

○男女相性^{ひのえつま}并^か丙^{のえさる} 午・庚 申の事

- 16)【愚言】生剋(五行説における5元素の相関関係)に迷って(『大雑書』『節用集』『百人一首』頭書など)、世俗の良縁を捨てるのは全く蒙昧なるが故である。
- 17)【愚言】天地の間に五行の生剋があるのは甚だ尊いが、男女間で生剋を論ずるのは甚だ軽んずべき事である。
- 18)【愚言】生まれ年に守り本尊をつけ、魂の数を付けるなどは仏者の作であって、これらの妄説に迷うべきではない。

○血脈の事……根拠のない評判や噂を鵜呑みすべきでない。血脈が悪いとする病気の原因を調べるべき。悪疾(大半が癩病)の原因や感染経路、食生活との関係について医書からの引用や俗説を載せる。

○息男^{むすこ}慎むべき条々……良縁を求める為の男性の心掛け19力条。身を慎む、結婚3年前から女色を慎む、その気がないのに女性に手紙を送って傷つけるべきでないこと、他人の妾に手を出さないことなど。

○雑記……人の容姿の美醜について遺伝的要因・環境的要因に関する諸説。美人の妻を望むなら一刻も早く取り組むべき。早婚の是非に関する諸説(早婚の親の子供は夭折しやすく、十分に育てられないなど)。武士に生まれた女性は相手の容姿を選び好みできないなど。

○娘を見る伝……女性的美醜を見極める秘訣。醜い女性の縁談テクニックとして、男を酒で酔わせ、夜、薄暗い行灯の影から女性を見せたり、あるいは、顔立ちの良い妹の替え玉見合いをさせた後、醜い姉と結婚させるなど詐欺師まがいの実話も載せる。そのほか、見合い席上での心得や著者の見解を載せる。

○婚礼略伝……婚礼に関する諸説。作者が師事する恩田仲任(1743-1813、尾張藩士・儒学者)の「我が分限に応じて計らうを礼法に合^{かな}うとは言う」を受けて、「(婚礼の)式法は定まりありて定まりなく、定まりなくして定まりあり」と述べる。婚礼儀式についての議論では、三三九度の盃を新婦から始める当時の風習について、仲任は婿入婚の名残とする。

○婿心得べき事……婿の心得。諸説とともに、「夫婦の和順と不和の違いは、多く夫に原因がある」「男女の性は異なる。いかなる才女といえども、男にとって取るに足らない事ばかり言うものだ」「妻を持つ庶民は、時々遊郭に行っても、妾などを囲っておくべきではない。オランダでは、遊女はもっぱら独身男性の慰みであって、妻帯者の為のものではないと蛸書に書かれている」などの自説を披瀝する。

○夫婦の情……著者は凡例で30歳以上のことは推量であると断ったテーマの一つ。

19)【一九日】客と遊女の間は嘘を以て和順し、夫婦の間は実を以て和順す。

20)【百歳翁曰】夫婦は年寄りてからが^{おも}主なり。交媾(性交)の事はいつしか離れて、供に年若い、身^{いたわ}勞^{かたみ}れ、互に世話を^として、よろず切にする心安さ。親子というとも是程にはあらず。【愚言】さも^{うば}ありぬべし。世間に^{じよう}尉(翁)と^な姥とありて一方死すれば、残りたる者、程あらずして又死ぬるものなり。されば、老体になりては陰陽の釣りにて存^{ながらえる}命ことか。

21)【或る女曰】色事の実情と夫婦の実情とは大いに異なる。色事の実情は、ただ逢いたい見たい、愛し懐かしと偏^{ひとま}に思うのみなり。夫婦の実は、愛しうなくて愛しく、懐かしくのうて懐かしく、愛せずして愛し、思わずして切に思う。何もかも此の如くにして、自ずから誠内にこもる。此の故に華々しからずして実無きが如し。

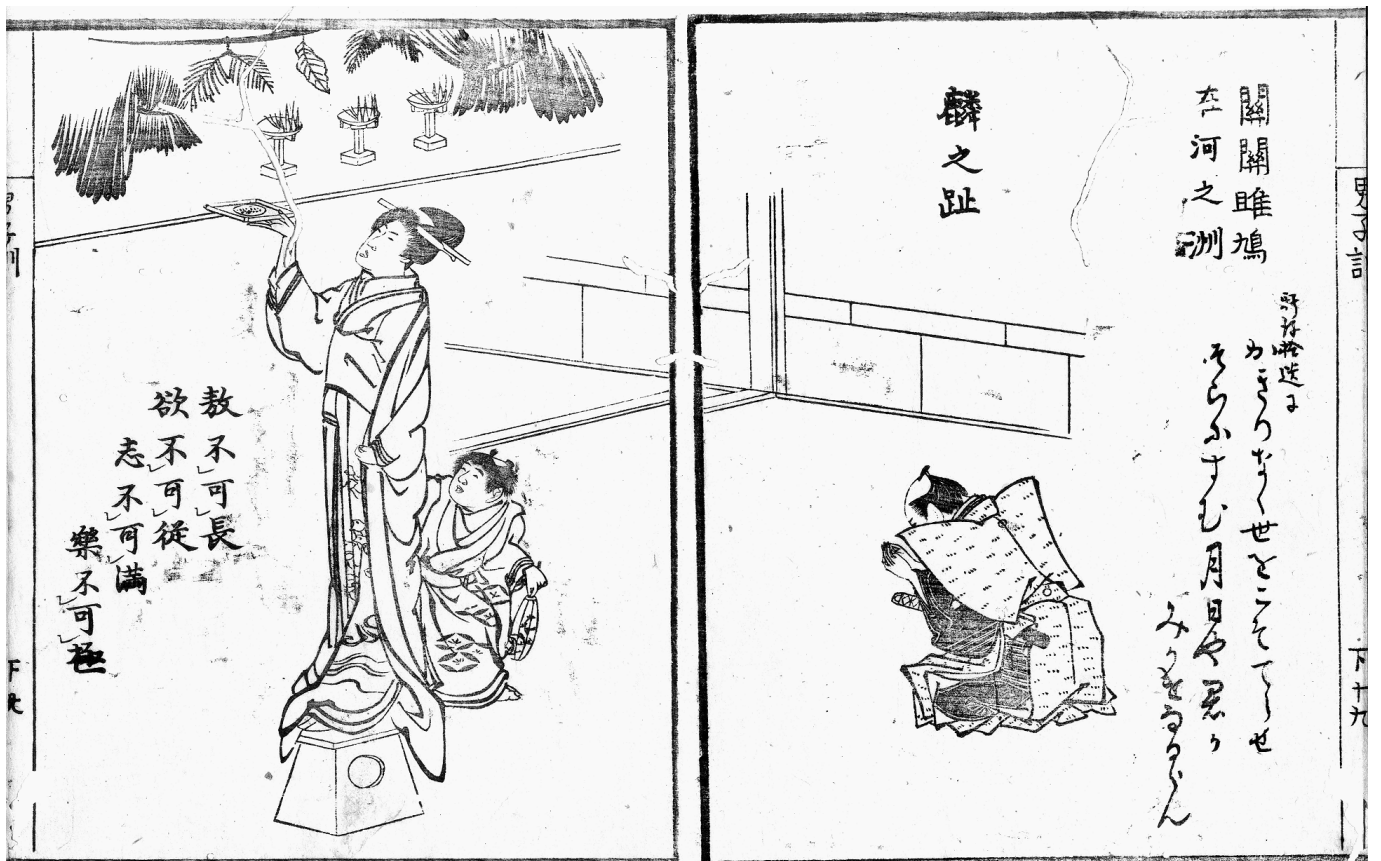
○夫婦交媾慎むべき事……「性交が多いと長生きできない」など性生活についての諸説。健全な性交の頻度、性交を慎むべき時節、子を授かるための性生活上の心得等。

關關^{しよきゆう}たる^{しよきゆう}雉鳩は河の洲に在り、窈窕^{ようたう}たる^{ようたう}淑女は君子の好き^{つれあ}迷ひなり。

(カンカンと鳴きあうミサゴの夫婦が川の中州にいる。しとやかな淑女は、君子のつれあいに相応しいものだ。)

『新後拾遺(和歌集)』に、「かぎりなく世をこそてらせ、そらにすむ月日や君がみかげなるらん」

傲^{おこ}りは長ずべからず。欲は従うべからず。志は満たすべからず。楽しみは極むべからず。



■江戸の結婚経済学と仲人ビジネス——華鳳山人作、寛政8年(1796)刊『〈新板後篇〉嫁入談合柱』ほか

○現代の結婚費用(結納・婚約～新婚旅行) *「ゼクシィ結婚トレンド調査2017」(読者アンケート5123件)

1)地域別の結婚費用(結納・婚約～新婚旅行)

地域	結婚費用総額(万円)
全国(推計値)	463.3
首都圏	484.2
①	480.7
富山・石川・福井	477.7
②	476.7
③	475.1
長野・山梨	469.0
宮城・山形	466.5
新潟	466.5
福島	464.5
静岡	462.6
岡山・広島・山口・鳥取・島根	451.8
四国	451.1
④	447.5
青森・秋田・岩手	447.1
⑤	296.6

2)首都圏の内訳*各項目と総額は一致しない

費用項目	平均額(万円・%)
結婚費用総額(推計)	484.2 100.0%
仲人へのお礼	4.0 0.8%
結納式の費用	27.5 5.7%
両家の顔合わせの費用	7.1 1.5%
婚約指輪	37.9 7.8%
結婚指輪(2人分)	24.9 5.1%
挙式・披露宴・披露パーティ総額	370.6 76.5%
新婚旅行	63.6 13.1%
新婚旅行土産	9.7 2.0%

★①～⑤に入る地域を選んでください。
 ・北海道
 ・茨城・栃木・群馬
 ・東海
 ・関西
 ・九州

○江戸庶民の結婚費用 *便宜上、1両=10万円、銀1匁=1667円として換算

- 江戸末期・豪農の結婚費用 * 下蓮田村(現・埼玉県蓮田市)、慶応3年(1867)「御祝儀二付証入用扣帳」
 ・祝宴料理、婚礼衣装、仲人謝金その他 → 合計73両1朱 ≒ 730万6000円 * 下表「上の下」クラス
- 江戸後期・豪農の婚礼支度金 * 文化12年(1815)、生麦村(現・横浜市鶴見区)、関口藤右衛門娘ちよ19歳
 ・新郎(川村松五郎)側からの結納金(帯代金千疋=2両2分、清酒一樽代金500疋=1両1分他) ≒ 37万5000円
 ・関口家が支払った婚礼支度金(花嫁衣装、婚礼道具等一式 → 合計30両 ≒ 300万円 * 下表「中」クラス
 ・仲人(古着商、山田屋惣八)謝金 → 合計3両 ≒ 30万円 * うち1両8分?を御祝金として返金
- 江戸後期・商家の婚礼費用 * 文政10年(1827)、大坂雑喉場(現・大阪府中央区)魚問屋、神崎屋平九郎娘てい23歳
 ・神崎屋から婿方(富田屋久兵衛)への結納金(絹布料5両他) ≒ 50万円 * 持参金代わりに、下表「上の下」クラス
 ・婚礼道具(着物類・道具類・書籍他263点)
 ・仲人謝礼(御内儀謝礼・酒肴料・菓子料合計8両) ≒ 80万円 * 両家折半
- 『〈新板後篇〉嫁入談合柱』による婚礼費用 * 作者による寛政頃の目安

結納品上中下の違い * 斜体字は推計

	上の上	上	上の下	中	中の下	下
結納品	白金	金子 300匁	金子 150匁	金子 75匁	金子 15匁	金子 15匁
	白縮緬	白縮緬 180匁	白縮緬 100匁	黒縮緬 50匁	モール帯 40匁	鯛 8匁
	緋縮緬	紅 100匁	紅 100匁	綿帽子 6匁	綿帽子 5匁	御酒 2匁
	紅	綿 110匁	鯛 8匁	鯛 8匁	鯛 8匁	
	綿	熨斗 15匁	御酒 10匁	御酒 5匁	御酒 5匁	
	熨斗	鯉節 30匁				
	昆布	御酒 10匁				
	鯛					
	御酒					
	合計	745匁	368匁	144匁	73匁	25匁
円換算	124万円	61万円	24万円	12万円	4万円	
婚礼	合計	9484匁	3473匁	1665匁		
道具	円換算	1581万円	579万円	278万円		

* 以上のほか、持参金(別途その1割が仲人謝金)、婚礼祝言(料理等)、引出物・謝金など多大な出費を要した。

○江戸の仲人ビジネス

おのがはかむらうそじづくし

1) 『(道外節用) 小野篁謹字尽』(式亭三馬作、文化3年(1806)刊)

『小野篁歌字尽』に似せて作った本文を始め、語彙を中心とする種々のパロディーを集めた往来物風の滑稽本。

*1行目は人偏に「春・夏・秋・冬・暮」という嘘字。★どう読むか？

- 「イ+春」
- 「イ+夏」
- 「イ+秋」
- 「イ+冬」
- 「イ+暮」

*『小野篁歌字尽』の冒頭は「椿・榎・楸・柎・桐、春つばき、夏はえのきに、秋ひさぎ、冬はひ(い)らぎに、同じくはきり」。

2) 暮れの嫁

「娘と糯米は年の暮れに片付く」

「おくれが済んだらお正月」

→ 人に物をねだるとき、買物をするとき、また、人から「おくれ」と言われた時などに言うことは遊び。「おくれ」に、物をくれの意と年の暮れの意をかける。(『故事・俗信ことわざ大辞典』小学館)



持参金 嫁なけなしの 鼻にかけ (歌川国芳画『神事行灯2編』)



持参金 よくよく見れば 鼻もあり (溪斎英泉画『神事行灯』3編)

3) 諺や川柳が示す仲人

①「仲人口は当てにならぬ」「仲人口は嘘八百の掛け値」「仲人の空言」「仲人口は半分に聞け」

「仲人の嘘七駄片荷」*「嫁入道具が七駄(馬7頭分)もある」との仲人の話も、実際は1頭の半分しかない。

②「仲人するならふなうどしろ」*ふなうどは葬儀委員

「仲人は三歳駒の毛の数だけ喋らねばならぬ」*縁談をまとめるために長広舌を振るわねばならぬ。

③「仲人は腹切り仕事」

④「仲人の履物切らし」「仲人は金の草鞋が三足いる」「仲人は下駄三足減らす」

⑤「仲人一つしてもらうと七つして返さねばならぬ」

⑥「仲人は痘痕の数まで数えて来る」*顔のあばたの数までチェックする。

仲人の夫婦わらひが上手なり(柳樽初篇)

仲人は小姑一人殺すなり(柳樽4篇)

瓜実を見せてかぼちゃと取っかへる(柳樽拾遺初篇)

雨まで誉めて帰る仲人(武玉川16篇)

見ましたは細面だともめる也(柳樽13篇)

仲人にかけては至極名医なり(柳樽拾遺初篇)